

教員養成課程の学生における鍵盤楽器練習についての調査研究

— 「練習が楽しい」ということに注目して—

命婦 恭子・岩佐 明子*・伊藤 充子

A Survey on the Extent of Piano Playing in Childhood Education Major Students – Noticing that Students' Enjoyed Playing the Piano –

Yasuko MEIFU, Akiko IWASA and Mitsuko ITO

はじめに

幼稚園教諭、小学校教諭を養成する課程（以下、養成課程）において、学生のピアノ演奏技術の習得は重要な課題である。本来、ピアノ演奏技術やそれを用いた弾き歌いの技術は、子ども音楽的感性を育成するための様々な方法の中の一つに過ぎないのだが、学生の実習先であり就職先でもある幼稚園や小学校ではピアノやその他の鍵盤楽器が設置されている場合が多く、それを用いて音楽教育を実践することになるのが現状である。また、羽根田（2004）が公立および私立幼稚園85園を対象に行った質問紙調査では、複数回答で69園が「ピアノは効果的な楽器である」と回答しており、39園が「ピアノ伴奏は必要不可欠である」と回答している。これらの回答と「ピアノ演奏技術習得が一般的である」と回答したのが14園であったことを併せて考えると、幼児教育におけるピアノ伴奏について、ただ慣例だからという以上の積極的意義を感じている園が多いことを示している。

そのため、養成課程の音楽科目の授業では、ピアノの演奏技術を習得させるために様々な工夫がなされている。特に、大学入学まで鍵盤楽器のレッスン経験がない初心者の学生が演奏技術を習得するための工夫として以下のような報告がある。小森（2010）は、音楽への興味関心を高めるために、簡単なメロディーでも表情豊かに演奏される曲を課題曲としている。同じく選曲の工夫として、実習で演奏される可能性が高い曲を課題曲とする方法もとられている（吉岡ら, 2013）。また、練習方法としては、自分の演奏を録音してセルフモニタリングを行うことで自分自身の技術の未熟さや表現の乏しさに自ら気づくことをうながす方法が実践されている（原, 2009）。すなわち、養成課程では、学生が初心者であっても興味関心を持って意欲的に、かつ、効率よく練習できるための支援が求められている。

養成課程の音楽教育において、学生が鍵盤楽器の練習をしようと思う、いわゆる「やる気」を起こさせるということというのが求められる。心理学で「やる気」は「動機づけ」という用語で扱われる心理的現象である。動機づけ理論は「認知 (cognition)」、「情動 (emotion)」、「欲求 (need)」の3つの理論群に大別することができる（鹿毛, 2004）。鍵盤楽器の練習が実習に行くために必要であるということや採用試験の可否に関連しているということについての理解は動機づけの「認知」に関わる部分である。ところが、それを理解しているにもかかわらず学

* 京都文教短期大

生が練習をしない、あるいは、教員が必要と感じているほど熱心には練習しないということが、養成課程の現場では散見される。そこで本研究では、動機づけの「情動」の側面に着目する。すなわち、「楽しい (enjoyment)」と感じる活動には時間を忘れて没頭することもできるだろうし、やりたいという気持ちを持ち、実際にその活動を行うこともあるという考え方である。このような考え方にそって、練習を楽しんでいるかどうかと自主的な練習の頻度に注目し質問紙調査を実施する。

目的

本研究で対象とした「音楽演習1」「音楽演習2」という科目は、それぞれ1年生と2年生に配当されている通年科目であり、ピアノ演奏、弾き歌い、合奏、声楽、音楽理論の課題が学生に課される。本研究では、これらの課題のうちピアノ演奏と弾き歌い、合奏を中心に取上げている。ピアノ演奏と弾き歌いでは、学生は個別に実技の試験を受けるが、合奏では5～6人の小グループを編成し、各グループで選曲や楽器の選択を行い、試験はグループでの演奏という形式で行われる。このように特性の違う課題を学生に課したときに、授業担当者が感じた「弾き歌いの練習をしているときよりも、合奏の練習をしているときの方が楽しそうだ」という素朴な印象が本研究の出発点である。弾き歌いの練習も合奏の練習のように楽しむことができれば、もっと練習するのではないかという、授業担当者の想いを検証するために、本研究では、学生が練習に対して感じている「楽しさ」が練習頻度と関連しているかを質問紙調査を用いて数量的に分析することを目的としている。分析結果から、学生が弾き歌いやピアノ演奏の練習頻度を増やすために、授業担当者ができる働きかけについての考察を行う。

方法

1. 対象者

4年制大学において2年生科目として開講されている「音楽演習2」を履修した女子学生114名。「音楽演習2」は、幼稚園教諭と小学校教諭の教員免許取得を目指す学科において、教科に関連する選択必修科目として開講されている。対象学生のうち、大学入学までの鍵盤楽器の経験年数は、全く無いものが26人、1～5年が20人、5～9年が37人、10年以上が30人、不明が1人であった。

2. 尺度

本調査のために作成したオリジナル尺度を用いた。項目は授業実施者による観察に基づき採集され、複数名の音楽担当教員により検討された。

1) 弾き歌いの練習について

弾き歌いは、ピアノ伴奏と歌で構成されている。そのため、練習においてはピアノと弾き歌いを区別せず「ピアノ・弾き歌いの練習」について質問した。本研究では、ピアノと弾き歌いの練習を区別せず「弾き歌い練習」と表記する。授業や試験での演奏は個人で行うが、授業外での練習では複数名で練習室に入り、練習している姿が見られる。このようなことを踏まえ、

「練習は楽しいか」「練習は難しいか」「一人で練習をする頻度」「一人練習への好意度」「友達と練習する頻度」「友達との練習への好意度」について尋ねた。6項目について4件法での回答を求めた。

2) 合奏の練習について

合奏の練習について弾き歌いの練習と同じ内容の項目に対して尋ねた。6項目について4件法での回答を求めた。

3. 手続き

2012年の8月に調査を実施した。授業終了後に授業担当者が質問紙を一斉に配布し、その場で学生が記入したものを回収した。

4. 分析方法

各項目についての選択肢ごとの度数を集計し、項目間の関連を χ^2 検定かFisherの直接確率検定で検証した。欠損値は項目ごとに除外した。統計ソフトはSPSS ver.17.0を使用した。

結果

1. 項目ごとの度数集の集計

各項目の回答について集計したものをTable1とTable2に示した。

弾き歌いの練習に関しては、38人(33.3%)が楽しいと回答し、やや楽しいと回答した63人(55.3%)と合わせると88.6%が弾き歌いの練習に対して楽しいという回答をしていた。その一方で、「練習は難しいか」との項目には、難しい(31人, 27.2%)とやや難しい(53人, 46.5%)を合わせると73.7%が難しいと回答していた。

練習頻度は、一人での練習を毎日しているのは3人(2.6%)であり、最も多いのは週1～2日(72人, 63.2%)であった。友達との練習を週3日以上しているものは見られず、週1～2日が42人(36.8%)であった。

一人での練習を好き(29人, 25.4%)または、やや好き(56人, 49.1%)と回答したものを合

Table1 弾き歌いに関する項目の選択肢ごとの度数

項目	選択肢				合計
	楽しい	やや楽しい	ややつまらない	つまらない	
練習は楽しい	38	63	12	1	114
練習は難しい	10	20	53	31	114
一人で練習をすることが	毎日	週3～4日	週1～2日	しない	
	3	37	72	2	114
一人での練習は好き	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い	
	29	56	26	3	114
友達と練習をすることが	毎日	週3～4日	週1～2日	しない	
	0	0	42	72	114
友達との練習は好き	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い	
	31	53	28	0	112

Table2 合奏に関する項目の選択肢ごとの度数

項目	選択肢				合計
	楽しい	やや楽しい	ややつまらない	つまらない	
練習は楽しい	75	35	4	0	114
練習は難しい	11	20	66	17	114
一人で練習をすることが	毎日	週3~4日	週1~2日	しない	
	2	1	44	67	114
一人での練習は好き	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い	
	10	40	48	16	114
友達と練習をすることが	毎日	週3~4日	週1~2日	しない	
	0	4	102	7	113
友達との練習は好き	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い	
	85	26	2	1	114

わせると74.6%であった。友達と練習するのが好き (31人, 27.6%) または、やや好き (53人, 47.3%) を合わせると75.0%であった。

合奏の練習に関しては、75人 (65.8%) が楽しいと回答し、35人 (30.7%) がやや楽しいと回答した。難易度については、66人 (57.9%) がやや難しいと回答し、17人 (14.9%) が難しいと回答していた。

練習の頻度は、一人での練習はしないと回答したもの (67人, 58.8%) が最も多く、友達との練習は週1~2日と回答したもの (102人, 90.3%) が最も多かった。一人で練習することはやや好き (40人, 35.1%) とやや嫌い (48人, 42.1%) に回答が分かれていた。友達との練習は、好きと回答したものが85人 (74.6%) と最も多かった。

2. 弾き歌いの練習が楽しいかどうかと他の項目との関連の分析

項目間の関連を分析するために4カテゴリー同士で χ^2 検定を行うと、ほとんどの組み合わせで期待度数が5未満になるセルが20%以上出るところから、項目ごとに3あるいは2カテゴリーに置き換え χ^2 検定を行った。置き換え前と置き換え後の対応についてはTable3に示した。

分析の結果、「弾き歌いの練習が楽しいか」と関連が見られたのは、「弾き歌いの一人練習が好きか ($\chi^2=11.96, p<.01$)」、「弾き歌いの友だちとの練習が好きか ($\chi^2=6.73, p<.05$)」、「合奏の練習は楽しいか ($\chi^2=8.65, p<.05$)」の3項目であった (Table4)。残差分析の結果、弾き歌いの練習を「楽しい」と回答したものは、弾き歌いの一人での練習と友だちとの練習を「好き」と回答している割合が高く、弾き歌いの練習を「つまらない」と回答しているものは、弾き歌いの一人での練習を「嫌い」と回答する割合が高かった。弾き歌いの練習を「楽しい」あるいは「やや楽しい」と回答したものは、合奏の練習も「楽しい」と回答する割合が高かった。

3. 弾き歌いの練習が難しいかどうかと弾き歌いの練習との関連の分析

弾き歌いの練習を難しいと感じているかどうかと、弾き歌いの練習頻度とその好意度の関連についてFisherの直接確率検定を行った (Table5)。関連がみられたのは、友だちとの練習の好意度についてであった ($p=.025$)。弾き歌いの練習を難しいと回答しているものは、友だちとの練習を好きと回答する割合が高かった。

Table3 各項目の選択肢置き換え前後の対応表

項目	選択肢				
弾き歌いについて	練習は楽しい	楽しい	やや楽しい	つまらない	つまらない
		楽しい	やや楽しい	つまらない	つまらない
練習は難しい	易しい	やや易しい	やや難しい	難しい	難しい
		易しい		難しい	難しい
一人で練習をすることが	毎日	週3~4日	週1~2日	しない	しない
		週3日以上	週2日以下		
一人での練習は好き	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い	嫌い
		好き	嫌い		
友達と練習をすることが	毎日	週3~4日	週1~2日	しない	しない
	-	-	週1~2日	しない	しない
友達との練習は好き	好き	やや好き	やや嫌い	嫌い	嫌い
		好き	やや嫌い		
合奏について	練習は楽しい	楽しい	やや楽しい	つまらない	つまらない
		楽しい		やや以下	
練習は難しい	易しい	やや易しい	やや難しい	難しい	難しい
		易しい		難しい	難しい
一人で練習をすることが	毎日	週3~4日	週1~2日	しない	しない
	-	週1以上		しない	しない

置き換え前の選択肢 ハイフンの選択肢はn=0
置き換え後の選択肢

Table4 弾き歌いの練習への好意度評価と他の項目との関連

		弾き歌いの練習			合計	χ^2 値
		楽しい	やや楽しい	つまらない		
n		38	63	13	114	
弾き歌いの練習	易しい	13	15	2	30	2.23 n.s.
	難しい	25	48	11	84	
弾き歌いの一人練習	週3日以上	14	18	8	40	5.22 n.s.
	週2日以下	24	45	5	74	
弾き歌いの一人練習	好き	33	47	5	85	11.96 **
	嫌い	5	16	8	29	
弾き歌いの友達との練習	週1~2日	16	19	7	42	3.23 n.s.
	しない	22	44	6	72	
弾き歌いの友達との練習	好き	34	42	8	84	6.73 *
	嫌い	4	19	5	28	
合奏の練習	楽しい	32	36	7	75	8.65 *
	やや以下	6	27	6	39	
合奏の一人練習	週1日以上	19	22	6	47	2.37 n.s.
	しない	19	41	7	67	

n.s.:non-significant *p<0.05 **p<0.01 整数の数値は度数。欠損値は分析ごとに除外。

4. 合奏の練習が楽しいかどうかと合奏の練習の関連の分析

合奏の練習が楽しいかどうかと合奏の練習が難しいかどうか、一人で練習するかどうかについてFisherの直接確率検定を行った(Table 6)。いずれの項目とも有意な関連はみられなかった。

5. 弾き歌いの練習と鍵盤楽器の経験年数の関連

弾き歌いの練習とこれまでの鍵盤楽器の経験年数の関連を分析するために χ^2 検定を行った(Table 7)。一人での練習は経験年数による有意な違いがみられなかった。友だちとの練習では χ^2 値が有意であった($\chi^2=8.50, p<.05$)。残差分析の結果、経験年数が10年以上の学生で友だちとの練習をする学生の割合が多かった。

Table5 弾き歌いの練習の難易度評価と他の項目との関連

	弾き歌いの練習			Fisher	
	n	易しい	難しい		合計
		30	84		114
弾き歌いの一人練習	週3日以上	8	32	40	n.s.
	週2日以下	22	52	74	
弾き歌いの一人練習	好き	25	60	85	n.s.
	嫌い	5	24	29	
弾き歌いの友達との練習	週1~2日	10	32	42	n.s.
	しない	20	52	72	
弾き歌いの友達との練習	好き	17	67	84	*
	嫌い	12	16	28	

n.s.:non-significant *p<.05 数値は度数。欠損値は分析ごとに除外。

Table6 合奏の練習への好意度との関連

	合奏の練習			Fisher	
	n	楽しい	やや以下		合計
		75	39		114
合奏の練習	易しい	24	7	31	n.s.
	難しい	51	32	83	
合奏の一人練習	週1日以上	26	21	47	n.s.
	しない	49	18	67	

n.s.:non-significant 数値は度数。欠損値は分析ごとに除外。

Table7 弾き歌いの練習と鍵盤楽器経験年数の関連

	鍵盤楽器の経験年数					χ^2 値	
	n	なし	1-4年	5-9年	10年以上		合計
		26	20	37	30		113
一人練習	週3日以上	11	10	9	10	40	4.45 n.s.
	週2日以下	15	10	28	20	73	
友達との練習	週1~2日	10	4	11	17	42	8.30 *
	しない	16	16	26	13	71	

n.s.:non-significant *p<.05 整数の数値は度数。欠損値は分析ごとに除外。

考察

1. 楽しいとより多く練習するのではないかという疑問について

弾き歌いの練習について楽しいと回答している学生は33.3%であり、やや楽しいと回答した55.3%と合わせると、88.6%がポジティブに評価しているという結果であった。その一方で難しい、あるいはやや難しいと感じている学生は73.7%であった。 χ^2 検定の結果、楽しいと感じているかと難しいと感じているかに関連はみられず、弾き歌いは難しいから楽しくない、あるいは、難しいことに挑戦するから楽しいというような関連はなく、難しさと楽しさをそれぞれ感じている学生が多いということが明らかになった。さらに、楽しいと感じている学生が、弾き歌いの練習をよくしているかということについては、楽しいかどうかと一人での練習を週にどの程度するかという項目に関連はみられず、友だちとの練習をどの程度するかという項目とも関連はみられなかった。また、本来グループで行う合奏の練習を一人でも練習するかという項目への回答比率にも有意な差はみられず、この項目とも関連がないことが明らかになった。これらのことから、練習を楽しいと感じている情動が練習を行うという行動には直接つながっていないことが示された。

弾き歌いの練習が楽しいと回答した学生が、他の学生と比較して特徴的だった項目は、弾き歌いの練習が好きかどうかである。弾き歌いの練習が楽しい学生は、一人での練習でも友だちとの練習も好きだと回答している。また、合奏の練習も楽しいと回答している学生が有意に多く、弾き歌いの練習を楽しんでいる学生は、ピアノ以外の楽器を用いた練習も楽しんでいる様子がうかがえる。このように、「楽しい」という情動は、「好き」という他の情動や他の楽器や形態の練習を楽しいと感じる情動との関連はみられるものの、実際に練習をするという行動面にまでは影響していなかった。

本研究では、授業担当者の予想に反して、多くの学生たちが弾き歌いの練習を楽しんでいる様子が示された。それでは、なぜ担当教員が期待するほどの練習量が確保できないのか。弾き歌いの練習頻度に影響する要因として、情動などの心理的要因とは別に、環境などの外的な要因が考えられる。外的要因の影響について、津山（2007）は、「練習環境」「教員との人間関係」「クラスの雰囲気」「授業の理解度」「練習時間」「履修内容と方法」の6項目を設定している。練習環境は、練習するための楽器へのアクセスの良さである。対象校では、ML教室1室、レッスン室7室、練習室24室あり、授業で使用していない時間は学生が自由に練習できるように準備されている。「練習時間」の項目は、練習時間が十分に取れたかどうかをたずねるものであり、教員免許取得のため2年生の前期では、ほとんどの学生が週13～16コマの授業を履修しており、ボランティア活動やアルバイト、部活やサークルなどの学外の活動をしている学生も多く、そのような多忙な生活の中で、授業時間外にピアノを練習する時間を確保することの難しさがうかがわれる。これらのことから楽しいと思うけれど、日々の授業や生活に追われて練習時間が確保できないという学生の姿が想像される。

練習時間確保のために、「練習環境」の項目で問われているピアノへのアクセスの良さは重要である。大学でのレッスン室や練習室へのアクセスについては、どの学生においても同等であるが、自宅にピアノを所有している学生ほど、練習環境が整い、練習時間を確保しやすいのではないかと考えられる。津山（2007）は、鍵盤楽器経験者と初心者の比較を行い、経験者（92人）のうち70人（76.1%）が「ピアノを練習環境が整っていた」と回答しており、初心者（83

人)では51人(61.4%)であった。また、練習時間について「十分とれた」と回答した経験者は、56人(60.9%)であり、初心者は35人(42.2%)であった。このような先行研究の結果から自宅に楽器を所有している鍵盤楽器経験者の方が、外的要因が整っており、練習頻度が高くなるのではないかと予想されたが、今回の分析結果では、経験者と未経験者の個人での練習頻度には差がみられず、友達との練習頻度にも有意な差がみられた。すなわち、自宅ではなく学校のレッスン室を利用した練習の頻度に差がみられるということが示された。

2. 練習頻度を増やすための示唆

今回の分析では、練習頻度と直接関連している項目を見つけることが出来なかった。ただ、どのような指導が練習量を増やすことにつながるかのヒントがみえてきたように思う。

分析の結果、弾き歌いの練習が難しいと感じていることと友達との練習を好むことに関連がみられた。弾き歌いの一人での練習を好むかどうかとの関連はみられていない。この結果から、弾き歌いについて苦手意識がある学生は、友達と練習することに安心感を覚えるのではないかと推察できる。それでは、ピアノの演奏技術に大きく影響する鍵盤楽器の経験年数と弾き歌いの練習の関連はどうだろうか。経験年数が10年以上の学生で、友達との練習をやるかどうかにも有意な差がみられた。苦手意識が在る学生ほど友達との練習を好むが、実際に友達との練習をよくしているのは、経験年数が多くピアノの演奏技術が高い学生であった。この二つの結果から、経験年数が多い学生と苦手意識のある学生がグループで練習すること促進するような指導方法を提案したい。それにより、苦手意識のある学生も安心感を持って練習をすることができ、友達と練習する習慣がある演奏技術の高い学生に誘われることで練習頻度を増やすことができるのではないかと考える。

複数名で同時にレッスン室に入り、ときに会話をしながら弾き歌いの練習をする様子は、練習に費やしている時間に対して個々人が実際に演奏している時間が短く、ピアノの演奏技術習得という目標に対して非効率的に感じるかもしれない。しかし、小グループでの練習は、授業の形態としてすでに取り入れられている。対象校では大学入学後、学生の鍵盤楽器の経験年数や音楽の知識を調査し、習熟度別にグループ分けされ、グループレッスンが実施される。従来の個別レッスンでは、教員と学生との2者間の相互作用の中で演奏技術の習得や音楽表現への理解を深めるような指導がなされていた。これに対して、学生3～4人の小グループと教員とでレッスンを行うことで、教員と学生の相互作用に加えて、学生同士の意見の交換やモデリング学習といった相互作用が行われることが期待される。このような取り組みに加えて、授業時間外の学生の自主的な練習も2人以上の小グループで実施することを提案したい。また、その小グループは習熟度別ではなく、経験が浅く苦手意識がある学生と演奏技術が高い学生などが混在したグループを推奨したい。

グループでの練習は、複数の学生が集まり互いの演奏技術や音楽理解をピアノ演奏や言語を用いて表現し、交流し合いながら行うものであり、その効果について協同学習という視点から考察できる。佐藤(2010)は、教室の中で行われる教科教育における協同学習の効果を発達の最近接領域(zone of proximal development)の理論によって根拠づけている。協同学習に参加する子どもたちの多様性によって、多元的で重層的な発達の最近接領域を構成し、そこでの対話的コミュニケーションが一人ひとりの「背伸びとジャンプをよびおこす」としている。また、協同学習は教え合いの関係ではなく、学び合いの関係であることが強調されている(佐藤, 2010)。教え合う関係は、一方向的な非対称関係の繰り返しになるが、学び合う関係は、相互

に対等な対称的関係であり、互恵的な学び (reciprocal learning) を実現させるとしている。学び合う関係は、つまりいた子どもが仲間への問いかけを発することから始まり、その問いを共有し探求する関係を築くことである。すなわち、互いに共有した問いを探求することで、お互いの理解が確かなものになっていくという効果がみられる。これを学生の楽器練習に当てはめると、演奏技術や音楽理論への理解が多様な学生が集まって練習することで、重層的な発達の最近接領域を構成し、それぞれの学生が仲間の援助により各自のレディネス (readiness) 以上のレベルに到達できると考えられる。さらに、そのような効果は、演奏技術が低い学生だけではなく、演奏技術が高い学生にもみられ、全体のレベル向上につながると考えられる。

3. 今後の課題と展望

本研究は、一つの学科の一学年の学生を調査対象としており、集団の特徴を反映している可能性が否めない。しかし、他大学などに対象を広げると、授業内容や練習環境に違いがみられ、交絡要因が多くなってしまふ。今後は、同一科目の受講者に対し年度ごとに調査を繰り返し、対象集団を広げていくことが望まれる。

また、分析においては、採集したデータが順序尺度ばかりであり、多変量解析にかけることが難しく、 χ^2 検定を繰り返してしまった。このような手法では第一種の過誤を起こしやすい。さらに、質問紙では4件法でたずねているが、そのまま χ^2 検定を行うと、期待値が5未満になるセルが複数出てしまうことから、2あるいは3カテゴリーに置き換えて分析を行った。これらの問題は、前述したような手法で対象者数を増やすことで、複数の順序尺度の関連を同時に分析することが出来るようになり、改善されると考えている。

本研究では、学生の練習頻度を増やす方法として、ピアノが苦手な学生と演奏技術が高い学生が混在する小グループでの練習を提案した。さらに、弾き歌い練習においても協同学習を推奨することでより高い学習効果がみられるのではないかという考察を行ったが、現時点では練習頻度の増加や練習の効果について実証的なデータによる検討はできていない。今回提案した方法による学生への指導の実施とその効果検証は、今後の課題として残された。

4. まとめ

質問紙調査を行うことによって、授業担当者の印象に反して、多くの学生たちは弾き歌いの練習に対して楽しい、あるいは好きだというポジティブな情動を喚起していることが明らかになった。しかし、その評価が練習の頻度の増加にはつながっていなかった。このように学生が練習に関して感じていることを数値化して示すことができたことが、本研究の成果の一つであると考えられる。また、練習の頻度を増やすための指導法として、ピアノの演奏技術が多様な学生が協同で練習することを促進する指導を提案する。そのような練習形態により、演奏技術や音楽理論の理解に対して互恵的な学びが成立し、全体のレベル向上につながると考えている。

参考文献

- 羽根田 真由美 (2004). 幼稚園教諭に求められる音楽的資質——保育現場と学生の比較をもとに—— 鳥取短期大学研究紀要, **49**, 17-30.
- 原 浩美 (2009). 音楽スキルに応じた効果的な指導について (2) 久留米信愛女学院短期大学研究紀要, **32**, 11-17.
- 鹿毛 雅治 (2004). 「動機づけ研究」へのいざない 上淵 寿 (編) 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- 小森 光紗 (2010). 学生の学習意欲を高めるピアノ教育の一考察——J.フルゲミュラー「25の練習曲」の指導を通して—— 埼玉純真短期大学研究論文集, **3**, 51-56.
- 中島 卓郎 (2002). 実践的指導力を高めるピアノ教育の試み——教員養成教育の場合—— 教育実践研究, **3**, 31-40.
- 佐藤 学 (2010). 教育の方法 左右社
- 津山 美紀 (2007). 器楽 (ピアノ) の授業に対する、学生の学習意欲について 九州女子大学紀要, **44**, 83-98.
- 吉岡 亜沙美・木村 鈴代・岸川良子 (2013). 保育所・幼稚園実習における弾き歌いに関する現状と課題 日本保育学会第66回発表要旨集, 499.